青森県総合学校教育センター　研究論文　[2015.3]
Ｆ９－０１

小学校・中学校・高等学校　教育相談

学校復帰を目指すための不登校対応の研究
－不登校対応チャートを基にしたコンサルテーションを通して－

教育相談課　　研究員　　小山内　　将　淳

要　　旨

本研究では，不登校児童生徒の学校復帰を目標に，不登校対応チャートを基にしたコンサルテーションを実施し，教師の不登校児童生徒に対する認識や対応が変容し，不登校児童生徒が学校復帰へ向かうかどうかを検証した。教師が不登校児童生徒の状態を見て，段階を踏んで対応した結果，学校復帰へ向かった。コンサルテーション前後で教師の認識や対応に変容が見られ，不登校対応チャートを基にしたしたコンサルテーションが効果的であることが明らかになった。

キーワード：不登校　コンサルテーション　不登校対応チャート　不登校対応パンフレット

Ⅰ　主題設定の理由

不登校問題について，文部科学省（2014）の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において，平成25年度の全国における不登校児童生徒数は，小学校24,175人，中学校95,442人，高等学校55,657人，計175,274人存在し，そのうち青森県は，小学校が197人，中学校が985人，高等学校322人，計1,504人となっている。青森県における不登校者数はここ数年減少しているものの，全児童生徒数における不登校者数の割合は横ばいの傾向を示している。また文部科学省（2014）は「不登校に関する実態調査」において，平成18年度に中学校を卒業した不登校生徒の５年後の追跡調査を実施しており，高等学校や大学に進学した者は48.1％，就業した者が34.5％，非就業・非就学者が18.1％存在し，特に非就業・非就学者の割合が，2010年の国勢調査における20歳人口の失業者・非労働人口の割合8.6％を大幅に上回ると報告している。不登校の問題を長期的に捉えると，学校や本人・家庭の問題のみならず，国家の経済問題にまで発展する問題であることを示唆している。

一方，学校現場では学級担任が中心になり様々な不登校の対応をしたり，不登校対応委員会等による組織的対応をしたりするものの，なかなか改善が見られず，不登校状態が長期化することがある。不登校対応の一つとして家庭訪問があるが，金澤（2003）は本人・家庭・地域と学校を一番よく知っている学級担任が行うことで大きな効果が期待でき，訪問指導の意味を十分に考え，確かな技術として身に付けた教師が，躊躇せず心熱く行えば復帰できる子どもは増すと訪問指導の大切さを訴えている。しかし実際には家庭訪問が再登校につながらない，時間がない，一人にかまっていられない，家庭の問題には踏み込めない，そっとしておいてほしいと言われ，手の打ちようがないなどという教師の知識や技術の不足が不登校問題を長期化させる原因であると述べている。

不登校問題を解決に導くためには，教師が児童生徒の立場になって考え，具体的にどのような対応をしていけばよいのかを理解し，実行できることが大切になってくる。そこで花輪（1991）による不登校対応チャートを基に，不登校児童生徒を受けもつ学級担任とコンサルテーションを行うことで，教師の不登校児童生徒に対する認識や対応の変容が見られ，結果として不登校児童生徒が学校復帰へ動き出すと考えた。また，不登校対応をまとめた教師用と保護者用の不登校対応パンフレットを作成し，広く普及させることで不登校対応に苦慮する教師を支援できると考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

不登校児童生徒の対応に苦慮する教師に向け，不登校対応チャートを活用したコンサルテーションを行うことで，教師の不登校児童生徒に対する認識や対応の変容をもたらし，不登校児童生徒が学校復帰へ向けて動き出すことを，コンサルテーション実施前後の調査を通して明らかにする。また，不登校対応に苦慮する

教師と保護者に向けて不登校対応パンフレットを作成し，支援する。

Ⅲ　研究の実際とその考察

１　研究における基本的な考え方

(1) 不登校対応チャートについて

不登校対応チャートとは，花輪（1991）の「児童生徒の不登校に関する学校の取り組み方や指導援助の進め方についての研究」において，教師が不登校児童生徒や保護者に対して行う指導や援助と，保護者がとるべき対応をまとめたものである。教師や家族が不登校の状態に対して抱いている「困ったこと・悪いこと」というネガティブ（negative）な見方を，この子どもにとっては「必要なこと・大事なこと」というポジティブ（positive）な見方に変えることで共感的な認識や意識に変容し，教師や保護者の焦りや不安が軽減され，じっくりと待つ姿勢になっていく。そして，家庭訪問を通して教師が不登校校児童生徒を支援する段階を，①認識，②援助・指導，③チェック，④積極技法，⑤再登校，⑥フォローの段階に分けて，不登校児童生徒の心的エネルギーの状態や行動の様子を観察し，段階に応じた対応をしていくことで，不登校児童生徒の不足している心的エネルギーが満ちていき，元気を取り戻し，将来に対する夢をもちはじめ，学校への関心度が上がり，不登校が解決に向かうと述べている（図１）。

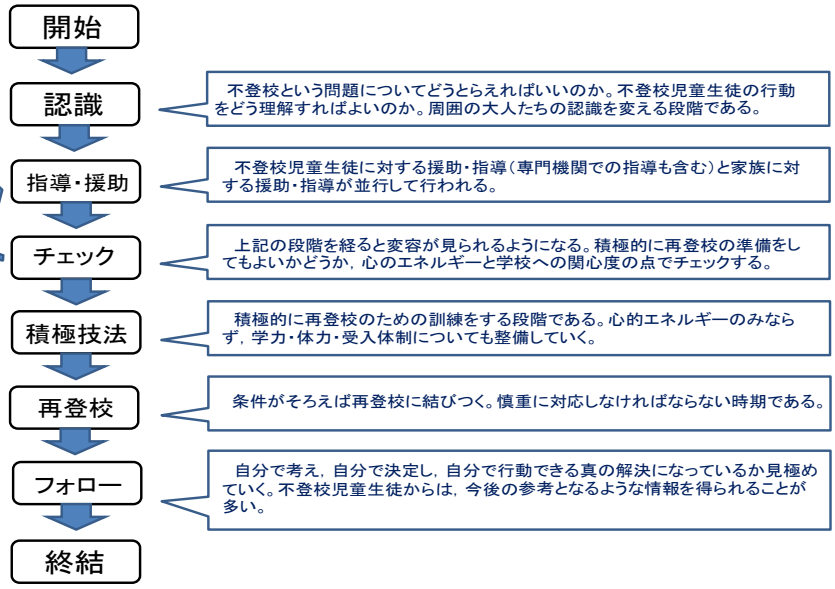


図１　不登校対応チャートの段階と概要　花輪（1991）

また，支援を続けていくことについて花輪（1991）は，自分で考え，自分で決定し，自分で行動できるように児童生徒に関わっていくことが大切であり，そのためには，教師や保護者が不登校児童生徒の感情をキャッチし，児童生徒の気持ちを育てていくことや，自主性を育てていくことで自ら選択し，判断する力を付けることが，真の問題解決であると述べている。

このチャートを活用し，不登校児童生徒の心の認識や教師の不登校児童生徒に対する意識の在り方や指導援助の在り方をまとめた教師用の不登校対応パンフレットを作成することで，教師が児童生徒の立場になって考え，心的エネルギーの様子を見ながら不登校対応を進めることができるようになると考える。また，適応指導教室等の関係機関が設置されていない市町村や，関係機関と教師が定期的にコンサルテーションを実施することが難しい場合等，教師が不登校対応パンフレットを参考にして，段階的に不登校対応ができるようになることも期待している。

(2) コンサルテーションについて

国立特別支援教育総合研究所（2014）は，コンサルテーションを「異なる専門性をもつ複数の者が，援助対象である問題状況について検討し，より良い援助の在り方について話し合うプロセス」とし，自らの専門性に基づいて他の専門家を援助する者をコンサルタント，そして援助を受ける者をコンサルティ，直接指導や支援を受ける者をクライアントと呼んでいる（図２）。

学校現場で間接的な援助サービスとしてのコンサルテーションを活用する場合，コンサルタント（スクールカウンセラーや教育センター職員等）が援助する対象は，コンサルティ（学級担任）や，クライアント（不登校児童生徒やその保護者）であり，子どもや学級担任等が抱えている問題を中心に，問題点の整理や評価をし，具体的な対応策を検討しながら問題解決を図ることがもっとも一般的であるとしている。内容としては，①知識の提供，②精神的な支え，③新しい視点の提示，④ネットワーキングの促進等があり，専門的な知識を身に付けるようにマネジメントすること，担当者が抱えている不安に対して，他の取組なども紹介しながら安心感を与えること，課題に対する捉え方に関して新たな見方を提案すること，組

織・管理上の問題について改善策を検討すること，その他，外部の有効な資源へ繋いだりする場合があると説明している。花輪（1991）は適応指導教室等の関係機関・学校・家庭の関係について，不登校児童生徒が学校に復帰するには，学校とのパイプが確保されていなければならず，なるべく早い時期に関係機関と連携を図るべきとしている。また学校が関係機関に不登校児童生徒の指導や支援を任せたままにならないようにし，学校が不登校対応の主体な存在であるべきとしている。その理由として，関係機関と保護者が直接的・具体的な指導助言を受けることで，学校と家庭との信頼関係が崩れ，学校復帰が難しくなることもあるので，関係機関は教師へのアドバイザーであることが望ましいと述べている。

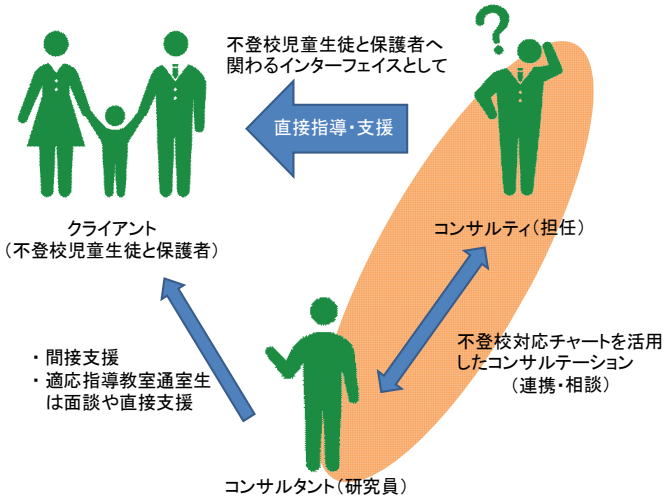


図２　本研究におけるコンサルテーション

２　不登校対応パンフレットについて

(1) 教師用パンフレットの特徴

このパンフレットを作成する目的は，①教師の経験や自身の勘に頼る不登校対応ではなく，児童生徒を取り巻く環境や心の状態を理解し，段階的に進めて行くための指針とするため，②教師が不登校児童生徒に対して抱く「困ったこと・悪いこと」というネガティブな見方を「今は不登校の状態だが，これは大人になるために精神的に脱皮しようとしているのだ」というポジティブで共感的な認識に変えるため，③不登校児童生徒の学級担任の負担を軽減し，学校全体で対応を考えることができるようにするため，④小学校・中学校・高等学校どの校種の教師も活用でき，不登校児童生徒をなくすため，である。

ア　不登校対応の全体像について

不登校児童生徒の未然防止の観点から，学校復帰までの対応の流れを１ページにまとめた。教師は必要なところから読み進められるように，目次の役目も果たしている。

イ　不登校の未然防止について

学級から不登校児童生徒が出ないよう，児童生徒を観察する際の注意点や，異変が見受けられる際の対応，学校・学級が落ち着く場所になるための取組，児童生徒一人一人が学級に所属感をもてるような取組など，教師が普段から意識すべきことをまとめた。また，授業内容が分からないことも不登校の原因の一つとして考えられるので，楽しく，分かりやすい授業についても触れた。

ウ　不登校の兆候・早期対応について

学校の様々な場面において，学級担任が日頃から心がけておきたい内容を記載した。児童生徒の観察を意識して行い，異変が見られる場合には教師が声かけを意識することや，欠席を連続的又は断続的に繰り返す様子から不登校の兆候が表れることがあるため，欠席時の学校の対応や，早期発見のためのチェックリストを掲載した。

エ　不登校児童生徒の支援について

ここは本パンフレットの中心となるところであり，この項目から読み始める教師が多いことを予想し，具体的な不登校対応をまとめた。内容に関しては，不登校対応チャートにおける指導援助の段階を踏襲して，①認識を変える，②心がけ，③チェック，④組織的対応，⑤ケース会議，⑥関係づくり，⑦登校刺激，⑧具体的支援，⑨フォローの順に記載し，不登校児童生徒の心的エネルギーや行動の様子を見ながら，段階を踏んで適切な対応ができるよう配慮して記載した。

オ　関係機関との連携について

不登校対応に悩む教師が，関係機関に不登校児童生徒の対応を任せてしまうことで保護者との関係が希薄になり，不登校の期間が長くなることがあるので，関係機関に相談する際の心構えを記載した。不登校対応の主体となるのは不登校児童生徒が所属する学校の教師であり，関係機関のアドバイスを受けながら，保護者と協力して不登校対応を進めて行くことが大切であると述べた。他に，教師が不登校児童生徒や対応に関する知識や理解を広げていくために，校外での研修会や書籍等から学ぶことを勧めて

いる。

オ　支援シートについて

支援シートは二つのパターンを提案している。支援シート作成の目的は，①学級担任が不登校に関する会議の前に，不登校児童生徒の現在の状態について認識していることや，担任が考えている対応などをまとめることができる，②会議に参加した教師は支援シートを見て，現在の不登校児童生徒の様子について共通理解を図ることができる，③不登校対応については，不登校対応チャートの指導援助の段階に沿って考えることができる，④会議に参加した教師全員で協議することで，対応に悩む学級担任を支えることができる，⑤担任は協議した内容を書き込み，実際に対応の際に活用することができる。以上のように学校全体で不登校対応を協議する際のガイドラインとなるよう考慮して作成した。

(2) 保護者用パンフレットの特徴

当初は，当センター教育相談課に面接相談のために来所する不登校児童生徒の保護者に向け，我が子の心情をどう捉えれば良いのか，また，具体的にどのような声かけや支援をすることが学校復帰へ有効であるのか，理解を深めるという目的で作成に取りかかった。さらに，当センターを利用する保護者に限らず，広く学校に配布し，学級担任を通して我が子の不登校対応に悩む保護者に渡すことで，家庭でできる支援や声かけの仕方が普及するように方針を転換した。

内容は，不登校児童生徒が心に抱く「自分は悪い子だ」「学級や家に居場所がない」など低下している自己肯定感を向上させるための声かけの例や，家族や学校の一員であるという連帯感を育てるための関わりなど心的エネルギーの高まりを見ながら，家庭でできる支援の仕方を中心に記載した。また，関係機関の関わり方も合わせて記載しているが，家庭と関係機関が結び付きを強くすることで学校と家庭の信頼関係が希薄にならないように，学校と家庭のつながりを意識して記載した。

３　実施方法について

(1) 平成25年度研究のコンサルテーションついて

平成25年度は，不登校対応支援シート（パターン１）を活用してコンサルテーションを実施した。

ア　コンサルテーションの概要

・コンサルタント：青森県総合学校教育センター教育相談課研究員
・コンサルティ：Ａ中学校　30代男性教師，Ｂ中学校　30代男性教師
・クライアント：Ａ中学校　３年生女子，Ｂ中学校　３年生女子

(ｱ) Ａ中学校について

コンサルテーションの対象は当センター適応指導教室に通室する３年生の女子生徒とその学級担任とした。コンサルテーションは６回（６月・７月・10月・11月・12月・２月）実施し，対象理由，心的エネルギーの様子，主な取組は以下のようであった（表１）。

表１　対象生徒の状況（Ａ中学校３年生女子生徒）

担任	生徒	対象理由	心的エネルギー	主な取組
男性 30代	３年生 女子	・中学１年の２学期から不登校 ・不登校のはっきりした理由は不明 ・両親が対応に困り，中学３年１学期から適応指導教室に通室	・絵を描くのが好きで非常に上手 ・バドミントンが得意 ・笑顔が少なく，話し声も小さい ・将来の夢がなく，そのため学習意欲が少ない	・担任の家庭訪問を週１日行う ・学校の相談室登校を目標にする ・スクールカウンセラーとの面談を実施する ・適応指導教室で研究員と面談し，週の目標を決め，将来を考える

(ｲ) Ｂ中学校について

コンサルテーションの対象は当センター適応指導教室に通室する３年生の女子生徒とその学級担任とした。コンサルテーションは２回（10月・２月）実施し，対象理由，心的エネルギーの様子，主な取組は以下のようであった（表２）。

表２　対象生徒の状況（Ｂ中学校３年生女子生徒）

担任	生徒	対象理由	心的エネルギー	主な取組
男性 30代	３年生 女子	・中学１年の６月から不登校 ・理由は隣の席の男子から嫌がらせを受けたこと ・学校に友人がなく，登校しても居場所がないと感じている ・中学１年から適応指導教室に通室	・アニメが好き・運動が苦手 ・同じ学校の生徒に会わなければ外出も可能 ・将来の目標がはっきりせず，そのため学習意欲がわかない	・担任の家庭訪問を週１日行う ・学校の別室登校を目標にする ・適応指導教室で研究員と面談し，週の目標を決め，将来を考える

(2) 平成26年度研究のコンサルテーションについて

平成26年度は，教師用の不登校対応パンフレットと支援シート（パターン１）を使用し，中学校３校においてコンサルテーションを実施した。

ア　コンサルテーションの概要

・コンサルタント：青森県総合学校教育センター教育相談課研究員
・コンサルティ：Ｃ中学校　30代男性教師，40代男性教師
　　Ｄ中学校　30代男性教師，30代養護教諭１名
　　Ｅ中学校　40代女性教師
・クライアント：Ｃ中学校　２年生男子，３年生女子
　　Ｄ中学校　２年生男子
　　Ｅ中学校　３年生女子

(ｱ) Ｃ中学校について

Ｃ中学校ではコンサルテーションの対象を２年生男子生徒とその学級担任，もう１名は当センター適応指導教室に通室する３年生女子生徒とその学級担任とした。２年生男子生徒の学級担任と面談によるコンサルテーションを２回（５月・７月），メールによるコンサルテーションを３回（10月・12月）実施した。３年生女子の学級担任と面談によるコンサルテーションを２回（６月・11月），メールによるコンサルテーションを３回（10月・11月）実施し，対象理由，心的エネルギーの様子，主な取組は以下のようであった（表３）。

表３　対象生徒の状況（Ｃ中学校２年生男子生徒と３年生女子生徒）

担任	生徒	対象理由	心的エネルギー	主な取組
男性 30代	２年生 男子	・不登校のはっきりした理由は不明 ・朝一度起きるが，めまいがひどく，午後になると治る ・週に数日，父親に連れられ相談室に登校できる ・広汎性発達障害の診断あり	・ゲームはあまりやらない ・宿題は忘れない・学力中程度 ・朝起きられない・午後まで眠気が強い ・母親の代わりに家事をする	・担任の家庭訪問（電話併用） ・別室で担任との面談 ・スクールカウンセラーとの面談 ・昼休みに友人と会ってみる
男性 40代	３年生 女子	・友人とのトラブルで完全不登校 ・朝は起きられず，生活が不規則なため，適応指導教室に通室	・学習意欲はあるのだが，理解するまで時間がかかる ・登校したい気持ちがあるが，朝になると体が動かなくなる	・担任の週１回の家庭訪問継続 ・適応指導教室で学習，体験活動，運動，研究員との面談を通し，心的エネルギーを高める

(ｲ) Ｄ中学校について

コンサルテーションの対象は，当センター適応指導教室に通室する２年生男子生徒とその学級担任とした。学級担任と面談でのコンサルテーションを２回（10月・12月），電話によるコンサルテーションを２回（７月・11月），メールによるコンサルテーションを３回（10月・11月・12月）実施した。養護教諭と，メールによるコンサルテーションを２回（11月・12月），面談によるコンサルテーションを１回（12月）実施した。対象理由，心的エネルギーの様子，主な取組は以下のようであった。（表４）。

表４　対象生徒の状況（Ｄ中学校２年生男子生徒）

担任	生徒	対象理由	心的エネルギー	主な取組
男性 30代	２年生 男子	・中１の２学期から不登校 ・クラスの生徒から宿題を忘れたことを非難され，担任との関係もうまくいかず，完全不登校となる ・広汎性発達障害の診断あり ・父母は同居せず，祖父母の相談を受け，適応指導教室に通室 ・中学２年になり，担任が替わった	・学習に苦手意識がある ・学校の教師や生徒に対し，強い拒否反応を示す ・釣りが好き ・ゲームが好き ・祖母とスーパーによく買い物に行く	・担任の家庭訪問を週１回実施 ・適応指導教室における学習，体験活動，運動，研究員との面談を継続し，心的エネルギーを高める

(ｳ) Ｅ中学校について

コンサルテーションの対象は，当センター適応指導教室に通室する３年生女子生徒とその学級担任とした。学級担任と面談によるコンサルテーションを２回（10月・11月），メールによるコンサルテーションを２回（10月）実施した。対象理由，心的エネルギーの様子，主な取組は以下のようであった（表５）。

表５　対象生徒の状況（Ｅ中学校３年生女子生徒）

担任	生徒	対象理由	心的エネルギー	主な取り組み
女性 40代	３年生 女子	・部活動で大切な試合を休み，部内の人間関係が気まずくなり，不登校となる ・自分の部屋から出ず，引きこもりとなる ・両親が対応に困り，中学３年６月から適応指導教室に通室	・昼夜逆転の生活をし，テレビを何時間も見ている ・学習意欲に乏しい ・学校の教師や生徒に対し，拒否感がある ・母親と一緒に買い物や食事等の外出ができる	・担任の定期的な家庭訪問を実施する ・適応指導教室における学習，体験活動，運動，研究員との面談を継続し，心的エネルギーを高める

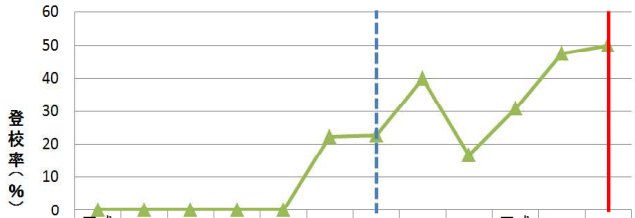
４　結果

(1) コンサルテーションの内容と対象生徒の登校率調査

ア　Ａ中学校３年生女子生徒のケース

中学１年生の２学期から不登校。中学３年生の６月から当センター適応指導教室に通室して学習や運動などを行った。その後，将来の希望がうまれ，９月に学校復帰することができた。

コンサルテーションでは以下のように対応を決めた。①本人の様子が気になるときに家庭訪問や電話連絡を適宜実施し，家庭と教師の関係を保つ，②登校後は相談室で中学１年生の内容の学習から学習支援をする，③本人とコミュニケーションを取り，良好な人間関係を築いていく，④生徒が自分で考え，決めたことを教師が尊重していき，自主性を育てていく。



	平成25年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成26年1月	2月	3月
登校すべき日数	16	21	20	18	7	18	22	20	18	13	19	6
登校日数	0	0	0	0	0	4	5	8	3	4	9	3
登校率	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	22.2	22.7	40.0	16.7	30.8	47.4	50.0

コンサルテーション開始
コンサルテーション終了

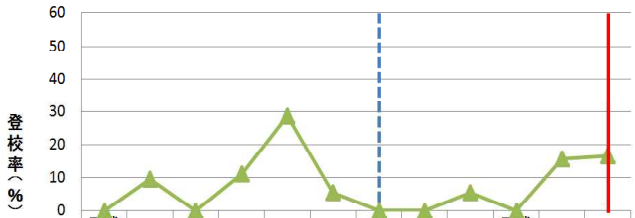
図３　Ａ中学校３年生女子生徒の登校率の推移

９月・10月は学校に慣れる目的で相談室に週１日登校し，学級担任と一緒に学習や進路の話や本人の趣味の話をして１～２時間過ごして帰宅した。登校率もほぼ横ばいであった。11月に入ると相談室に週２日登校できるようになり，２～３時間学習をして過ごした。登校率は40.0％となった。12月の登校は16.7％に落ち込むが，平成26年１月からは３学年の学級担任以外の教師が高校受検に向けて個別学習を行うようになり，登校率は30.8％と上昇した。２月には私立高校合格を目標に掲げ，学習以外に面接試験の練習のために登校を促すと登校率は47.4％に上昇した。３月に入り，卒業式の合唱練習や卒業証書授与の練習に参加できるようになり，教室復帰も果たした。卒業式も他の生徒と一緒に出席した。登校率は50％となった（図３）。

イ　Ｂ中学校３年生女子生徒のケース

中学１年生の６月から不登校となり，中学２年生の７月より当センター適応指導教室へ通室し学習や運動などを行った。しかし，学習意欲に乏しく，学習や他の活動は活発ではなかった。

コンサルテーションでは以下のように対応を決めた。①コンサルテーション実施前に月に２日登校したことがあることから，今後登校日数が増えるように，家庭訪問を週に１回実施し，家庭と密に連絡をとる。担任が多忙なため，家庭訪問が実施できない時は電話で連絡を行う，②別室登校した時には，学級担任とよくコミュニケーションを取り，何でも話せる関係性を築く，③学力をつけるために，中学校１年生の内容から学習を始める。



	平成25年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成26年1月	2月	3月
登校すべき日数	16	21	20	18	7	18	22	20	18	13	19	6
登校日数	0	2	0	2	2	1	0	0	1	0	3	1
登校率	0.0	9.5	0.0	11.1	28.6	5.6	0.0	0.0	5.6	0.0	15.8	16.7

コンサルテーション開始
コンサルテーション終了

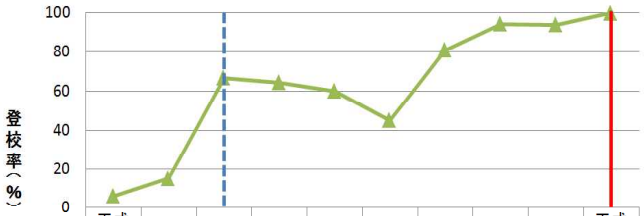
図４　Ｂ中学校３年生女子生徒の登校率の推移

自宅が学校から遠く，登校は母親の自家用車か公共バスを利用した。学校へは，母親が仕事の休みに

自家用車で送迎すると登校できた。５月，７月，８月はそれぞれ２日登校し，相談室で１時間程度過ごして帰宅した。コンサルテーション開始後は母親の仕事が忙しく自家用車で送迎できなかったので，結果的に登校できない月もあった。平成26年２月になると公共バスを利用し，相談室へ登校することができた。相談室では対応を専門に行う指導員が配置されており，その指導員と学習した。生徒がいない休日に，バスに乗って登校し，担任と高校受検に向けて面接練習をしたこともあった。コンサルテーション終了時の登校率は16.7％となった（図４）。

ウ　Ｃ中学校の２年生男子生徒のケース

１年生の時から朝起きることが難しく，父親に連れられ相談室へ登校する状態が２年生になってからも続いていた。相談室でも午後にならないと目が開かない状況であった。学級担任は家庭訪問や電話連絡をして保護者と情報交換をしていた。月に１日スクールカウンセラーが来校し，相談室で他の不登校生徒と男子生徒の個別面談を行っていた。



	平成26年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成27年1月
登校すべき日数	17	20	21	14	5	20	21	18	16	12
登校日数	1	3	14	9	3	9	17	17	15	12
登校率	5.9	15.0	66.7	64.3	60.0	45.0	81.0	94.4	93.8	100.0

コンサルテーション開始
コンサルテーション終了

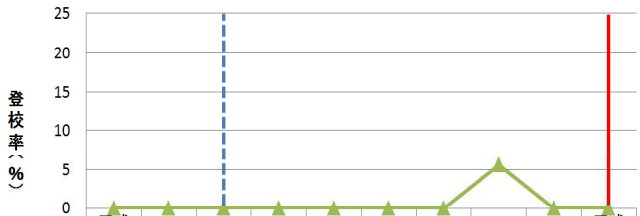
図５　Ｃ中学校２年生男子生徒の登校率の推移

コンサルテーションでは以下のように対応を決めた。①家庭訪問の継続，②一人で登校できるようにする，③相談室で学級担任やスクールカウンセラーと面談する回数を増やし，心的エネルギーを増やす，④本人と担任の面談で学級の様子を伝え，学級への抵抗感を減らす，⑤教師用と保護者用の不登校対応パンフレットと支援シートを活用し，コンサルテーションが実施されていない時期もパンフレットを読み，対応の参考にする。

コンサルテーション開始直前から週１～２日，相談室に登校できる状態であった。コンサルテーション開始後は登校率が上がり，10月に友人と昼休みに会えるようになってから学級に入ることができ，登校率が90％を超えた。平成27年１月の登校率は 100％であった（図５）。

エ　Ｃ中学校３年生女子生徒のケース

学級内の友人とのトラブルで２年生の３学期から不登校となった。学級担任はほぼ毎週家庭訪問し，本人と会って近況を聞くなど情報交換を密にし，気軽に話ができる関係を築いていた。卒業後の進路を心配した保護者が適応指導教室に相談し，平成26年６月から通室して学習と運動などを行い，学校復帰を目指した。



	平成26年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成27年1月
登校すべき日数	17	20	21	14	5	20	21	18	16	12
登校日数	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
登校率	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.6	0.0	0.0

コンサルテーション開始
コンサルテーション終了

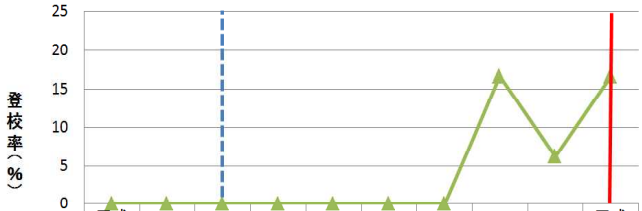
図６　Ｃ中学校３年生女子生徒の登校率の推移

コンサルテーションでは，以下のことを確認した。①週１日の家庭訪問継続，②プリントやワーク類による学習支援，③教師用と保護者用不登校対応パンフレットと支援シートを活用し，コンサルテーションが実施されていない時期もパンフレットを読み，対応の参考にする。

コンサルテーションは平成26年６月に開始した。学級担任は毎週家庭訪問を継続し，担任と本人は気軽に話せる良好な関係を築き，本人は学校へ行きたい気持ちが大きくなった。しかし，学校へ行きたい気持ちはあるのだが，朝になると体が動かず，登校できない日が続いた。11月に学級担任の誘いで，卒業アルバムに掲載される個人写真を確認するために登校することができたが，それ以後登校しておらず，当センター適応指導教室への通室を継続していた。適応指導教室では，毎週コンサルタントの研究員と面談を実施し，家庭での生活の様子や進路の話，本人の興味ある話をして心的エネルギーを増やす取組を行った（図６）。

オ　Ｄ中学校２年生男子生徒のケース

１年生の１学期に宿題を忘れたことを学級生徒から非難され，担任との関係もぎくしゃくし，２学期から不登校となった。学習や将来のことを心配した祖父母が当センター適応指導教室に相談し，通室することになった。本人は通室を開始しても，学校に対して強い拒否感をもっていた。



	平成26年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成27年1月
登校すべき日数	17	21	20	14	5	20	22	18	16	12
登校日数	0	0	0	0	0	0	0	3	1	2
登校率	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.7	6.3	16.7

コンサルテーション開始
コンサルテーション終了

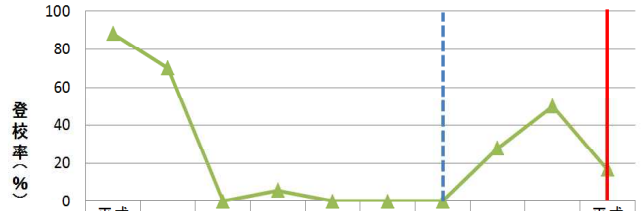
図７　Ｄ中学校２年生男子生徒の登校率の推移

コンサルテーションでは，以下のように対応を決めた。①担任が２年生になって替わったので，家庭訪問を毎週１回実施し本人と会えなくても継続する，②学習内容の定着が今一歩であったため，中学１年生の学習内容から学習支援を始める，③当センター適応指導教室研究員と情報交換を適宜行い，対応を考える，④教師用と保護者用不登校対応パンフレットと支援シートを活用し，コンサルテーションが実施されていない時期もパンフレットを読み，対応の参考にする。

コンサルテーションの開始後も，男子生徒が学級担任や登校に対し強い拒否をするので登校できない日が続き，10月まで登校はできなかった。適応指導教室ではコンサルタントの研究員と毎週面談を実施し，趣味の話や家庭や学校の不安話を聞き，心的エネルギーを高め，学校に関心が向くよう考慮して支援を続けた。10月に，学級担任から，家庭訪問の際に本人と会うことができたと連絡があった。平成26年11月に入り，本人に将来の夢ができ，高校に進学したいと考え，１年２か月ぶりに登校を始めた。以後は自分で体調を判断して，週１日の相談室登校を続けている（図７）。

カ　Ｅ中学校３年生女子生徒のケース

朝起きられないことが多く，２年生の３学期から登校しぶりがあり，部活動の試合を突然休んだことから部員との関係が悪くなった。３年生の６月に部活動の大事な試合を休み，部員に顔を合わせられなくなったことから不登校となった。



	平成26年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成27年1月
登校すべき日数	17	20	21	17	8	20	22	18	18	12
登校日数	15	14	0	1	0	0	0	5	9	2
登校率	88.2	70.0	0.0	5.9	0.0	0.0	0.0	27.8	50.0	16.7

コンサルテーション開始
コンサルテーション終了

図８　Ｅ中学校３年生女子生徒の登校率の推移

コンサルテーションでは，以下のように対応を決めた。①学級担任の家庭訪問を月に数度から週１回実施に回数を増やし，本人と会えなくても教師の優しい言葉で手紙を残す，②定期テストやアンケートなど，事務的・義務的な用事で保健室や相談室への登校を促す，③学級担任と適応指導教室との連携を強め，情報交換を密にする，④教師用と保護者用の不登校対応パンフレットと支援シートを活用し，コンサルテーションが実施されていない時期もパンフレットを読み，対応の参考にする。

不登校当初は自室に引きこもり，学級担任が家庭訪問しても保護者が留守で玄関を開けてもらえず，本人が家の中にいても面会できないことが続き，家庭訪問の頻度は月に数度程度であった。以後，家庭訪問するときは保護者が在宅しているときに限られ，本人と会うことはできず，玄関で情報交換をする程度に留まっていた。コンサルテーション開始前の７月に，卒業アルバムの撮影のために登校し，撮影後はすぐ帰宅した。11月の適応指導教室の文化祭終了後は登校するという本人の意思があり，週１～２日の相談室登校を始め，登校率は27.8%となった。以後も体調を本人が自分で判断し，週１日～２日の相談室登校を継続した（図８）。

(2)　教師の不登校対応状態の調査

コンサルテーション開始時と，コンサルテーション終了時において，学級担任の不登校生徒に対する認

識や対応の様子を一覧にまとめた（表６）。コンサルテーション開始時及び終了後の様子をそれぞれ「生徒への認識・心的エネルギーの判断」「不登校対応の様子」の２つの項目に分け，比較することで変容を考察することにした。

表６　コンサルテーション開始時と終了時における学級担任の変容

学校	生徒	学級担任	項目	コンサルテーション開始当初	コンサルテーション終了まで
A中学校	三年生女子	三十代男性	生徒への認識 心的エネルギーの判断	・不登校の理由が分からない ・家庭の問題ではないか ・卒業まで登校は無理かもしれない ・夢がなく，高校へ進学しないかもしれない	・話をすると普通の中学生と変わらず，普通の生徒だということが分かった ・夢を尊重することで本人のやる気がみるみる出てきた ・学級復帰できたのは本人の力が大きい
			実際の不登校対応の様子	・様々な登校刺激をしても登校しない ・家庭訪問週１回は家が留守がちで困難 ・毎週金曜日に母親が来校し，生徒玄関で情報交換をする ・適応指導教室にも通うことで進学の意欲が湧くかもしれない	・家庭訪問できない時は電話で保護者と情報交換し，生徒と保護者の理解に努めた ・担任の負担を考え，学年教師全員で学習支援に関わった ・卒業式出席の意向を聞き，学年全体で注意深く対応した
B中学校	三年生女子	三十代男性	生徒への認識 心的エネルギーの判断	・何かと面倒くさがる ・家が学校から遠く，登下校に時間がかかることも不登校の原因 ・学級に友達がいないので，学級復帰は無理なのではないか	・他の生徒に会わなければ学校までバスで登校できる→登校の意思があった ・面接練習をした→進学への意欲があった ・担任の関わりがあれば学校に向かう気持ちが大きくなると感じた
			実際の不登校対応の様子	・多忙で家庭訪問，電話連絡が疎遠 ・相談室へ登校すれば，指導員が対応してくれる ・適応指導教室に行ったほうが本人は楽しく元気になるだろう	・電話連絡を適宜行い，学校の日程や定期テストの情報を伝え，関係を保つ ・相談室へ登校した時に雑談をして関係性を築き，心的エネルギーの様子を考えて話すようになった
C中学校	二年生男子	三十代男性	生徒への認識 心的エネルギーの判断	・家が学校から遠く，歩いて登校するのが嫌なのかもしれない ・めまいがひどく，午後に治るのは気持ちの問題もあるのでは ・家庭教師と勉強しているので成績もよく，学校の必要性が低い	・面談ではめまいのことにあまり触れず，好きな事を話してもらい，心的エネルギーが高まった ・学習に取り組む姿勢を認めていくことで，自己肯定感が高まった ・話が合う友人と会い，学級への抵抗感が軽減した
			実際の不登校対応の様子	・多忙により，家庭訪問を毎週実施することが困難。電話で連絡を取り合う ・相談室まで毎日登校できる方法をいろいろ考えている ・面談の時間が少なく，話すことは学習や家庭のことが多い	・家庭訪問ができない時は電話で連絡を取り合い，保護者と関係性を築いた ・本人の心的エネルギーを高めるものは何か知るために話をよくした ・学級に話ができる友人がいれば心強い
	三年生女子	四十代男性	生徒への認識 心的エネルギーの判断	・なぜちょっとしたことで学校に来れなくなるのか分からない ・好きなアイドルにはまって勉強しない ・学校へ行きたい気持ちがあるが，踏ん切りがつかないでいる ・適応指導教室で元気になってほしい	・学習以外のことを提案すれば学校への抵抗感が軽減し，登校できる ・高校受験を意識しているので，受験に関係することであれば登校できた ・家庭訪問では学校の話より雑談が関係性を高めることが分かった
			実際の不登校対応の様子	・週１回家庭訪問を実施し，よく話せる関係性を築いた ・無理に学校への登校刺激はしない	・学習のやる気を出すために簡単な課題を出し，完了したことを認めた ・学級の受け入れ態勢を整えた（掲示物・座席・生徒への説明等）
D中学校	二年生男子	三十代男性	生徒への認識 心的エネルギーの判断	・発達障害があるので対応が難しい ・父母不在の家庭の問題もある ・釣りやゲームが好きなので怠けもあるかもしれない ・卒業まで登校は無理ではないか	・学校に対して拒否をしつつ，本当は学校を常に意識していたのではないか ・夢が生まれたことで学校の必要性を感じたのではないか ・他の生徒と関われるような支援を検討
			実際の不登校対応の様子	・多忙により，家庭訪問を毎週実施することが困難で電話で連絡を取り合う ・２年生から学級担任をした生徒で関係性を築いていくのが大変	・週１回の家庭訪問や電話での情報交換を欠かさず，祖母の家庭に対する不満も聞く ・適応指導教室の行事を参観し活動の様子を知り，学校での面談で感想を話し頑張りを認めた
E中学校	三年生女子	四十代女性	生徒への認識 心的エネルギーの判断	・家で長時間テレビを見てだらけている ・学校へ行きたがらず，どう関わっていけばいいかわからない ・適応指導教室に通うことで元気が戻るのではないか	・本人が好きなことを認めることで，心理的な距離が縮まった ・相談室登校をした日に，友人と会ったことで学校に行く楽しみが増えた
			実際の不登校対応の様子	・家庭訪問をしても両親不在で本人と会えず徒労感がある ・保護者が学校に連れて来るのを待っている	・家庭訪問で会えなくても手紙を残し，心配している旨を伝えた ・相談室登校の際は学級担任が主に対応し本人と面談や学習をして信頼関係を築いた

⑶ 不登校対応パンフレットについて

平成26年度のコンサルテーションで活用した教師用と保護者用不登校対応パンフレットについて意見を求めるため，平成26年度の研究協力校であるＣ中学校の教師（管理職・養護教諭含む）にアンケートを依頼し，16名から回答を得られた（表７）。各設問は（１）教師用パンフレットをどんな時に使いたいか，（２）不登校児童生徒を支援する際に，どの項目が参考になるか。（３）保護者パンフレットをどんな時に使いたいか，（４）教師用・保護者用パンフレットについて意見や感想を自由記述する。

回答数が多かった順にいくつか記載する。（１）に関しては「ア　不登校の未然防止」が12名，「イ　不登校の兆候」が11名，「ウ　不登校児童生徒の支援」が10名の順であった。

（２）に関しては，「⑧　具体的支援」が７名，「①　認識の段階」が５名，４名が選択した項目は三つあり，「②　心がけ」「④　組織的対応」「⑥　関係づくり」であった。

（３）に関しては，「ア　登校しぶりが見られる児童生徒の保護者に向けて」が10名，「イ　子どもへの言葉かけについて」が９名，「登校刺激のタイミング」が８名であった。

（４）は教師用と保護者用不登校対応パンフレットについて意見や提案など自由記述してもらった。教師用についての主な意見は「生徒が不登校の兆候を見せた時に参考になる」「支援シートが役に立つ」「様々な対応や声がけなど段階に応じて解説されていて活用しやすい」など有用と考えている教師が９名であった。他には「児童生徒を励ますところと受容するところの加減が難しい」「認識シートとチェックシートの分析の仕方がほしい」という回答が見られた。

保護者用についての主な意見は「言葉遣いや表現に工夫が見られる」「保護者に必要なところをコピーして配布できる」「保護者会で使える」など有用と考えている教師が10名，他に「文字数や情報数が多い」「教師から渡されたときに抵抗感をもつ保護者がいるのでは」と活用に関して慎重を要すると考えている教師が３名であった。

表７　教師用・保護者用不登校対応パンフレットについてのアンケート

⑴　【教師用】パンフレットについて、どんな時に使いたいと思いましたか？（複数回答可）

		選択者数
ア	１：不登校の未然防止…普段の学級経営や、学級の生徒への接し方などの参考に	12
イ	２：不登校の兆候…学級の生徒や学年の生徒に不登校の兆候があるか知りたいとき	11
ウ	３：不登校児童生徒の支援…不登校児童生徒や保護者への対応で参考にしたいとき	10
エ	４：関係機関との連携…関係機関に相談したいとき	3
オ	支援シート（パターン１）…学年会議やケース会議で生徒を把握するために使いたい	4
カ	支援シート（パターン２）…学年会議やケース会議で生徒を把握するために使いたい	2

⑵　不登校児童生徒の支援の「①　認識を変える」～「⑨　フォロー」の中で、どの項目が参考になると思いましたか。番号に〇をつけてください。（複数回答可）

	選択者数
①　認識の段階	5
②　心がけ	4
③　チェック	3
④　組織的対応	4
⑤　ケース会議	2
⑥　関係づくり	4
⑦　登校刺激	3
⑧　具体的支援	7
⑨　フォロー	0

⑶　【保護者用】パンフレットについて、どんな時に使いたいと思いましたか？（複数回答可）

		選択者数
ア	１ページ（登校しぶりが見られる児童生徒の保護者へ、家庭での様子を話し合うときなど）	10
イ	２ページ（子どもへの言葉がけで困っている保護者に対して、声がけの参考として）	9
ウ	３ページ（子どもへの見方が一方的な保護者に対し、見方を変える参考として）	7
エ	４ページ（子どもへの対応に苦慮している保護者や家族に対して、子ども認識の参考として）	7
オ	５～６ページ（登校刺激をするタイミングの確認や、関係機関の連絡先を知りたいとき）	8

⑷　不登校対応パンフレットについて、ご意見、ご提案など、お感じになったことをご自由にお書きください。（自由記述）

５　考察

⑴　コンサルテーション対象の不登校生徒の登校率の変容について

不登校対応チャートを活用したコンサルテーションでは，Ａ中学校の３年生女子生徒とＣ中学校の２年生男子生徒が学級復帰を果たすことができた。Ａ・Ｃ両中学校における共通点として，別室登校している生徒とよくコミュニケーションを取っていたことが挙げられる。また，支援シートを活用し，当該生徒が現在どの支援段階にあるのか把握し，生徒が感じている不安を軽減するべく，別室で学習支援や学級への不安を軽減する働きかけをしたこと，学級担任以外の教師が学習支援やコミュニケーションを取り，学校と学級への不安感を軽減させたことで徐々に登校率が上がり，結果的に学級復帰を果たしたと考える。

Ｂ中学校の３年生女子生徒とＤ中学校の２年生男子生徒とＥ中学校の３年生女子生徒の３名は登校できない状況から相談室や保健室等別室に登校することができるようになった。特にＤ中学校とＥ中学校の学級担任の家庭訪問が効果的であったと考える。Ｄ中学校の学級担任は，本人と会えなくても毎週家庭訪問を行い，保護者と何でも良く話している様子を本人が知り，学級担任や学校への拒否感が薄れたことや，学級担任が本人の夢を認め，高校進学へのアドバイスをしたことで学校へ復帰できたと考えている。今後は本人と学級のつながりをつけるために学級の様子を話したり，行事等で学級への所属感を高めることで登校率は上昇するものと考える。Ｅ中学校の学級担任は，家庭訪問をしても本人と全く会うことができない状態であった。支援シートを活用し本人の心の状態を確認していくと，学級担任が家庭訪問の際，女子生徒の保護者の勧めで部屋を見た行動が学校への不信感や拒否感につながっているのではないかと推測し，コンサルテーション後の家庭訪問で手紙を部屋の前に置いて帰宅した。手紙を読んだ女子生徒は学校への拒否感が薄れたと研究員との面談で話していた。また，高校進学を目標に掲げ，11月に相談室まで登校することができた。以後は週に１～２日相談室に登校し，担任と学習をしたりコミュニケーションを取ったことが登校率の上昇につながったものと考える。

Ｃ中学校の３年生女子生徒は，学級担任が家庭訪問の際に時間をかけてコミュニケーションを取ることで学校へ行きたいという気持ちが大きくなった。学級担任は学級の受け入れ態勢や相談室や保健室にいつでも登校できる体制を整えていたが，女子生徒は学習の遅れや他の生徒の目が気になり，継続的な登校へは結び付かなかった。しかし，放課後に生徒の目に触れなければ保護者とともに登校することができることから，面接練習など高校進学に向けた働きかけをすると別室登校が可能になると考える。

⑵　教師の意識や対応の変容について

コンサルテーション開始時に各学級担任の認識や対応で見られる傾向として，①不登校をネガティブに捉えていること，②多忙及び不登校生徒の家庭事情により家庭訪問の時間が十分確保できないと考えていること，③適応指導教室に通室する生徒の学級担任は適応指導教室の支援に期待していること，が挙げられる。①に関しては，様々な不登校対応を行うも，生徒に学校復帰の兆候が見られない状態の学級担任であれば少なからず抱く感情であると推察される。②に関しては，学校から生徒の自宅までの距離や，部活動や業務に追われ，家庭訪問するには遅い時間まで業務を行っていると推察される。③に関しては②と合わせ，家庭訪問をしても本人と面談することができなかったり，十分話をする時間を確保できなかったことから，より時間をかけて支援をする適応指導教室へ期待していると推察される。

不登校対応チャートを活用したコンサルテーションを通して，生徒の心的エネルギーの状態を判断し，段階を踏んだ支援を実践ていく過程で，コンサルテーション終了までに学級担任にいくつかの変容が見られた。主な傾向として　①家庭訪問や電話連絡の回数を増やし，情報交換を通して家庭との連携を図り，生徒本人の状態を把握しようとしたこと，②不登校の原因探しに終始せず，生徒の心的エネルギーが増えるような取組が見られたこと，③むやみに登校刺激をせず，本人の心的エネルギーの高まりを見てから登校刺激をしていることがあげられる。①に関しては，家庭と連絡を取り合うことで保護者の信頼を得られ，家庭での様々な行動や発言の様子を聞き，不登校対応に生かすことができるためであると推察される。②に関しては，不登校の原因を学級や学校から除去することは学校復帰を目指すために必要な取組であるが，不登校生徒にとっては教室や学校から原因はなくなっても，長期に渡り休んだことによる「うしろめたさ」や「気まずさ」「視線や心無い言葉の怖さ」などが先に立ってしまい，不登校当初の理由は薄れていることを生徒との面談で把握し，学校の中で困難なことに当たっても乗り越えられるよう考えての行動であったものと推察する。③に関しては，生徒の立場になって考えることで，登校刺激をする適切な時期を探っていたものと推察する。

⑶　不登校対応パンフレットのアンケート結果から

教師用の不登校対応パンフレットに関して，「不登校の未然防止」「不登校の兆候」の項目が役に立つと

回答した教師が多いことから，不登校児童生徒が発生してから対応を始めるのではなく，学級から不登校児童生徒を生まないことや，不登校の兆候が見られた時に見逃さないような対応をすることが大切であると考えている教師が多いことが推測される。次いで「具体的な支援」が選ばれていることから，不登校児童生徒にどのように関わっていけばよいのか，具体的な方法や段階を踏まえた対応法を求めている教師が多いと推測される。支援シートに関しては段階を踏まえた対応が分かり，それまでの不登校対応を見直した教師が多いと推測される。

保護者用の不登校対応パンフレットに関しては，保護者にどのように説明をして渡すべきか迷う教師がいたことから，保護者に協力を求めるためのパンフレットが，保護者の不安や学校への不信感を増加させ，関係性が悪くなるのでないかと危惧していることが推測される。しかし，保護者の協力を得るための手段として部分的に利用したいと考える教師や，保護者会で使いたいという教師もおり，家庭でできる不登校対応に関して学校と家庭が共通理解を図るための材料となると考える。

Ⅳ　研究のまとめ

本研究の目的は，不登校対応チャートを基にしたコンサルテーションを実施し，学級担任が不登校児童生徒に対する認識や不登校対応に対する意識を変え，経験や勘のみに頼らず，段階を踏んで適切な対応を取ることで，不登校生徒が学校復帰へ動き出すことを明らかにすることであった。

結果は，全ての中学校の生徒が完全不登校状態から学校復帰を果たし，そのうちＡ中学校の３年生女子生徒とＣ中学校の２年生男子生徒は，別室登校から学級へ復帰することができた。コンサルテーションを通して学級担任が生徒の心的エネルギーの状態を把握し，段階に応じた対応が効果的であったと言える。

また，学級担任の不登校生徒に対するネガティブな意識や指導的な対応が，共感的で未来を見据えたポジティブなものに変容し，結果的にコンサルテーションに関わった不登校生徒全員が登校率や登校回数の差があるものの，学校や教室へ入ることができたと考える。

不登校対応をまとめた教師用と保護者用パンフレットに関しては，どちらのパンフレットも不登校対応に有効であるという意見があった。教師用パンフレットに対する意見では，不登校児童生徒を受けもつ学級担任は対応の指針に使いたいと考え，不登校生徒を受けもっていない他の教師は，不登校生徒が学級から発生しないように意識していることがアンケートの記述から推測される。保護者用パンフレットに対する意見では，家庭でできる不登校対応が大切であり，そのためには保護者が我が子に対する認識を変えることが大切だと考えている意見があり，教師用と保護者用パンフレットを併用して不登校対応をすることが大切であると考えていることが示唆された。

Ⅴ　本研究における課題

本研究では中学校の学級担任を対象としたコンサルテーションを実施したが，実際には小学校や高等学校でも不登校対応に苦慮する教師が存在し，不登校対応チャートに基づいたコンサルテーションが小学校や高等学校にも有効かどうかを検証する必要がある。また，スクールカウンセラーをコンサルタントとしてコンサルテーションを実施し，スクールカウンセラーの活用の幅を広げることの効果を検証することも必要であろう。

教師用・保護者用ともに，不登校対応パンフレットはどの校種・学年でも対応の参考になるよう考慮して作成したが，実際に様々な校種の教師に活用してもらい，意見を聴き取ることでさらに内容をよいものにしていけるものと考えている。また，パンフレットのみを活用した事例を集めることで，本パンフレットが有効かどうかを検証できると考える。

＜引用文献・URL＞

１　文部科学省　2014　「平成25年度　児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/__icsFiles/afieldfile/2014/10/16/1351936_01_1.pdf（2014.12.19）

２　文部科学省　2014　「不登校に関する実態調査～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～分析編（３）」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/08/04/1349956_05.pdf（2014.12.19）

３　金澤純三　2003　「訪問型支援の取り組み」『月刊生徒指導2003年７月号』，p33，学事出版

４　花輪敏男　1991 『児童生徒の不登校に関する学校の取り組み方や指導援助の進め方についての研究』
山形県教育センター
５　国立特別支援教育総合研究所　2014　『コンサルテーションとは』
http://forum.nise.go.jp/soudan-db/htdocs/?page_id=52 (2014.12.18)
６　三浦俊二　2012　『中学校における不登校生徒への教師の関わりについての研究 -個別支援シートを活用したコンサルテーションとチーム援助の実践を通して- 』　青森県総合学校教育センター

＜参考文献・URL＞

佐藤奈央子　2013　『中学校に於ける不登校生徒の画工への適応感を高めるための研究　－不登校対応チャートを用いたコンサルテーションを通して－』　青森県総合学校教育センター